



©Yuki Nakase

クローズ氏と彼のスタジオ

## 照明家ジャン・クローズ

ニューヨーク老舗オフ・ブロードウェイ・シアターが立ち並ぶ4丁目に、照明家ジャン・クローズ氏のスタジオがあります。エスプレッソの香りと柔らかい陽射しに包まれる広いスタジオには、彼がこれまでに携わった作品のポスターが飾られています。現在はシャネル、カルティエ、ヴァレンティノ、バレンシアガ、セリーヌ、ラルフローレン、コーチ、トリーバーチ、ヒューゴ・ボス、エミリオ・プッチ、メゾン・マルジェラなど、名立たる高級ファッションとジュエリーブランドのショーケース、パーティやランウェイの照明デザインを設計するクローズ氏ですが、「ファッションの照明デザインに携わるには舞台照明と映像照明の両方の経験が不可欠」と話し、その拠りどころが常々気になっていました。

ロンドン育ちのクローズ氏は1969年に仲間とヘヴィライトという照明会社を立ち上げます。40台のパーライトと2台のフォロースポットを所有し、コンサートホールのラウンドハウスなどを中心に、ロックミュージックのライブイベントの照明係として働いた後、1971年に渡米します。初めに彼が向かった先はサンフランシスコでした。アメリカン・ブルースのバンド、ホット・ツナのライブの照明を担当したり、当時ロックコンサートには不可欠だったサイケデリック・ライト・ショーの団体、ガーデン・オブ・デライトと一緒に活動したり、「色鮮やかな日々だった」とクローズ氏は話します。対照的に、1974年に移った「モノクロの街」ニューヨークについて、彼は「食欲で危険な楽しさ」と表現しました。アンディ・ウォーホルの全盛期だったと言い、ウォーホル・スーパースターの一人、ジャッキー・カーティスが制作出演した舞台『グラマー・グローリー・アンド・ゴールド』がクローズ氏のデザインする初の舞台作品となりました。

ニューヨークへ移ってから約2年がたった頃、彼のキャリアに転機が訪れます。照明に関わる仕事ならジャンルを超えてすべてに挑戦すると決めたことでした。その活動は多岐にわたり、舞台、現代芸術、テレビ番組と映画製作、写真家の助手等、光を使用するさまざまな媒体に関わることから、方法は違えど皆同じゴールを目指していること、脳がどのように光という情報を使用するかを見出します。そんな折、クローズ氏がファッション業界に携わるきっかけとなったのは、クローズ氏が照明デザインしたジョイス・シアターでの舞踊公演だったと言います。たまたま公演を観にきていた、アメリカを代表するファッションデザイナーのジェフリー・ビーンがその灯りに心を打たれ、自身のショーの照明デザインをクローズ氏に頼みました。その後は飛ぶ鳥を落とす勢いでランウェイを最も美しく照らす照明家として名をはせ、ニューヨークと世界のファッションデザイナーご用達の照明家へと地歩を固めました。

ファッションの照明デザインにおいて最も大切なことは、「ブランドのスタイルを理解したうえでファッションデザイナーがなにを描写しているかを捕らえ、その情報をどのように伝えるかを考察すること」だとクローズ氏は言います。そのためにはランウェイに足を運ぶセレブリティやプレスの体験も、カメラを通して発信される情報も等しく重要で、ライブイベントから映像作品まで幅広く活躍してきた彼の経験が最も活かされます。「もっと芸術家との仕事を積極的に行って、照明器具作りにも精を出していきたい」と話すクローズ氏は、今後もまだまだ進化を止めないでしょう。